『クリスチャンの親として』

'23/04/30

聖書個所：エペソ人への手紙 6 章 4 節（新約 p.380）

つい最近、名古屋の方で、65 歳の女性が庭で草むしりをしていたら、そこに、嬰児の遺体を発見しました。その女性は驚いて、息子に電話をして、その息子さんが警察に 110 番をしたのですが…、実は、そこに嬰児の遺体を遺棄したのは、その遺体を発見した女性の娘だったということが分かりました。その後の報道を聞いておりますと、その娘は、地下アイドルに夢中になっていて、その遺体となってしまった子どもの父親が誰なのか、多分、分からないだろうという話だそうです…。

また、昨年には、こんな事件もありました。…神奈川県で、幼い姉と弟が置き去りにされた車内で熱中症を起こして亡くなってしまいました…。何と、その母親は、幼い子どもたちを車内に残して、意中の男性と数時間を過ごしていたのです。しかも、その事件が起こる2週間ほど前にも、同様のことがあって、その時は、近くを通りがかった近隣住民が泣き叫ぶ幼児たちを発見して、何とか、事なきを得たのだそうです。…そんなことがあったにも関わらず、その2週間後、その母親は、全く同じ過ちを繰り返して、幼い姉弟は、その小さないのちを失ってしまったのです…。

命題：クリスチャンの親は、どのように子どもと接していくべきなのか？

先週も言いましたように、現代は、大変難しい時代です。…こんなに、素晴らしい技術や数々の文明が発達しているにも関わらず、大勢の親たちのモラルが崩壊して、その子どもたちが大きな被害を被ってしまっています。…私たちが、少し前に学んだエペソ書４章以降のみことばは、私たちに教えてくれていました…、「あなた方クリスチャンは、神様によって新しく造り変えられたのです！だから、救われたクリスチャンとして…、神様に倣って歩んでいきなさい！あなた方は、それができるようにも変えられたのですから！」って…。私たちは救われた者として…、また、神様によって新しく造り変えられた者として…、どのようにして、この神様のことを伝え…、また、この救いを子どもたちに証ししていくべきなのでしょう？

実は、今日学ぼうとしている、エペソ 6:4 のみことばは、そういったことを私たちに教えようとしてくれています。今日は、ここの個所を通して、クリスチャンの親は、その家庭にあって、どのように子どもたちと接していくべきなのか？ということを学んでいきたいと思います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるエペソ 6:4 をお開きください。初めに、与えられました聖書のみことばをお読みいたします。そこには、このように記されてあります…。

4 父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。

Ⅰ・子どもを おこらせては ならない！

まず、最初に教えられてあるのは、子どもたちを怒らせてはならない！ということです。当然のことながら、私たちは、まず、このことを正しく理解していかないと、子どもたちを正しく…、また、聖書のみことばに沿って育てていくことはできません。初めに、そのことを確認していきましょう…。

●『父たちよ』⇒ここで言われている 意味 は？

まず、ここで言われている、『父たちよ…』という言葉が誰を指しているのか？ということについて考えてみたいと思います。確かに、ここで使われてあるギリシヤ語の言葉は、一般的には、「父親」を指す言葉（πατήρ）なのですが、この言葉が複数形で用いられた場合には、両親を指す場合もあると辞書にありました…。ですから、ここで言われている、『父たちよ…』というのは、決して、父親だけを指すと考えるべきではありません。父親も…、母親も…、当然、子育てに関して責任を負っているし…、その両者の協力が必要なのです。

では、何故、ここのみことばには、「両親よ…」とか、「親たちよ…」という言葉を使わずに、『父たちよ…』という表現が使われているのでしょう？？⇒実は、みことばは、こういった表現を通して…、夫婦の間におけるリーダーシップについても教えてくれているのです…。このことは日本語でも同じだと思いますが、「お父さん方…」と言った場合、その意味するところは、①何人もいる父親たちに対して語りかけている場合と、②そのご両親（＝父親と母親と）に対して話しかけている場合が有り得るのと同じです…。また、それだけではありません…。私たちは少し前に、エペソ 5 章後半からも学びました…。「夫婦の間におけるリーダーシップ…、つまり、その主導権は夫の側にある…」って…。そうでしたでしょ？

ですから…、今日のみことばで、『父たちよ…』と呼びかけられているのは、当然、そのご両親を指しているわけなのですが…、それと同時に、ここのみことばは、「その両親の内、父親の側に、より大きな責任があるのですよ！」ということを教えてくれているのです…。

●子育ての責任の 所在 とは？

ここのみことばだけではありません。でも、こういったようなみことばを見てみますと、子育てに関する責任の所在がどこにあるのか？ということが分かります…。聖書は、子育ての責任が、その両親…、特に、父親の側に、より多くあると教えるのです！

現代においては…、「子どもたちを教育するのは学校の責任だ！」と考える人が居るように思います。あるいは、クリスチャンの中でも、「子どもたちに聖書を教え…、訓練していくのは教会学校の責任だ！教会の働きの一環である！」と考えておられる方がいらっしゃるのかも知れません。しかし、皆さんはご存知でしょうか？「教会学校」というような子ども向けの聖書教育が教会で始まったのは、18 世紀後半のイギリスであって…、それまで、子どもたちの聖書教育は、各家庭でなされていたのです。聖書が教えてくれる…、子育てにおける、１番の責任の所在は家庭であり…、その両親にあると言うのです…。

●現代の 間違った 考え方とは？

次に、今日のみことばには、『子どもをおこらせてはいけません…』とあります。これは、一体、どういう意味なのでしょうか？まずは、ここで1つ、現代における間違った考え方を紹介させてください…。

恐らく、ここにおられる皆さんは、よくご存知だろうと思います。最近の教育法で、子どもたちに対して、「ダメ！」と言わない子育ての方法があるそうです。正直、私もテレビやインターネットで調べた程度で…、そんなに詳しくは知らないのですが…、できるだけ、子どもたちに対して、「ダメ！」というような否定的な言葉を使わないで…、その代わりに肯定的な言葉を使うのだそうです…。子どもたちに対して、「ダメ！」という言葉を使ってしまうと…、例え、親の側は、子どもの行ないや物事に対して言っているつもりでも…、子どもの側からすると、「自分自身が否定されている…、自分の人格そのものが否定されている…」と考えるのだそうです！だから、子どもたちが悪いことをしたり…、危険なことをしたりしても…、できる限り、すぐに、「ダメ！」とは言わずに…、「さあ、こうしよう！今度は、こうしてみたら？こうしたらうまくいくよ！」などというように子どもに教えるのだそうです…。

でも…、本当にそうなのでしょうか？例えば、聖書のみことばは、私たち人間に対して、「あなたは、生まれながらに罪人である！あなたは、聖い神様の基準に到底達してはいない！それゆえ、あなたには今現在、天から、神の怒りが啓示されている…」というようなメッセージから始まってはいないでしょうか？例えば、ローマ書などは、その典型です…。また、マタイ 5-7 章の、「山上の説教」と言われるイエス様のメッセージも同様でしたでしょ…。『心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。』（マタイ 5:3）という言葉で、私たちの罪深さを教えるような言葉で、あのメッセージは始まっていたじゃないですか！

それだけではありません…。18 世紀頃になると、欧米の方で、「子どもは生まれつき良い者…、つまり、純粋無垢な罪の無い存在として生まれてくるのだ…」というような考えが広まってきました。所謂、「性善説」とも言い得るような考え方です。子どもが悪い方向に傾いていくのは、子どもの周りの環境や社会、あるいは、親の育て方が悪いからだ、というように考えるのです。じゃあ、どうすれば良いのでしょうか？⇒何もしないことだ、と彼らは言うのです。親はできるだけ、しつけをするな！自然のままにさせよ、と教えるのです…。皆さんは驚かれるかも知れませんが、実は、現代のカウンセリングの手法でも、これと似たような方法があるのです…。

ところで、皆さんは、こういった考え方について、どのように思われます？…聖書は、明らかに、こう教えます、「人間は、生まれながらに罪人である」って…。親の教育や社会…、あるいは、環境が悪いから、子どもは罪人になっていくのではない！罪を持って生まれてきたから、子どもたちは罪を犯していくのだ！…と。親から受けるべき躾を受けていないから、子どもたちが罪を犯すのではありません。親が、みことばに従って、正しく、子どもたちをしつけ、罪を矯正してあげないから、益々、子どもたちは堕落していき…、どんどん、自制がきかなくなっていくのです。だから、私たちは、聖書のみことばに沿って、子どもたちを正しく育ててあげる必要があるのではないでしょうか？

唯一絶対者なる神様…、あるいは、その神様のみことばである聖書を知らない人たちが、様々な価値観の中で惑わされてしまうというのは分かります…。しかし、私たちクリスチャンは、そうであってはなりません！しっかりと…、神様のみことばに目を向けて…、神様の基準でもって、様々なことを吟味し、そして、理解して、何が神のみこころであるかを判断していかなければならないのではないでしょうか？…ねぇ、皆さん！

●『おこらせては いけません』とは？

今日のみことばには、『子どもをおこらせてはいけません…』とありますが、実は、ここで、『おこらせてはいけません』と訳されてある言葉（παροργίζω）は、普通に使われる、「怒る」という意味の言葉ではありません…。原語のギリシヤ語を観察してみると、この言葉は、普通の「怒る」という言葉（ὀργίζω）に、「もっと、さらに」というような意味を付け加えるための前置詞（παρά）とが一緒になった合成語なのです。ですから、この言葉は、通常の怒りを表わしているのではなく、もっと激しい怒りを指しているのです。

また、ギリシヤ語には、「怒る」という意味の言葉も幾つかあって、ここで使われている言葉は、一瞬、「ムカッ」と来るような…、そういった瞬間的な怒りを表わしているのではなく…、どちらかと言うと、長年に渡って…、怒りが熟成されていくような、そういった種類の怒りを表わすような言葉なのです。

ですから、「子どもの内に、親に対する激しくも、憎しみに満ちたような、そういった怒りを持たせてはならない！」…ということが、ここで教えられている聖書の教えです。ですから、ただ単に、子どもが親から注意されたり、あるいは、叱られたりして、「ムスッ」としているとか、いまいち、気持ちの整理がつかないでいる…、ということとは明らかに違います…。決して、聖書は、「どんなことがあっても、子どもを怒らせることがないように…、子どものご機嫌取りをしなさい…」というようなことを教えているのではありません…。

ここでは、『子どもをおこらせてはいけません…』という命令が、現在命令法と言って、習慣的な命令で、このことが教えられています。ですから、私たち親は、常に、子どもたちの状態に気を配り続けて…、子どもが自分たち親に対して、激しく憎しみに満ちたような怒りを持つことがないようにしていかないといけないのです…。

恐らく、現代に起こっているような…、親を殺したりするような凶悪な事件は、こういったような親に対する激しい怒りや、長年に渡って蓄積されたような憎しみが、形になって現われ出てきてしまったのではないでしょうか？

●子どもを怒らせないためには？

では、次に、私たちが考えていきたいことは…、「じゃあ、どうしたら、子どもたちは、そういったような…、激しくも憎しみに満ちた怒りを持たないようにすることができるのか？」ということです。皆さんは、どう思われますか？ここで、その幾つか…、それら代表的なものを挙げてみたいと思います…。

①子どものことを 信頼 しようとしない。

まず第１に、いつまで経っても、子どものことを信頼しようとしないことです。いつまでも、子どもたちのことを子ども扱いしてしまう、ということです。「～へ行ってはいけない！」とか、「～をしてはいけない！」とか、「～しなさい！」などというような…、まだ幼い子どもに対して言うようなことを、口うるさく何度も…、何度も言うのです…。子ども自身のことについても、自分で決めさせないで、親が勝手に決めてしまって、失望させたりするのです。「お前には、まだできないから！お前にはまだ無理だ！子どもだから！」というように…。

確かに、子どもたちは親の責任のもとには居ても…、親の所有物ではありません。子どもにも、ちゃんとした意思があり…、自由な選択が欲しいのです…。これは分かりますよね…。

②子どもを ひいき してしまう。

２番目に、子どものことをひいきしてしまう、ということです。創世記に出てくる…、あのイサクとリベカの間にも、そういったことがありました…。イサクは、どちらかと言うと長男エサウの方を愛しましたが…、妻のリベカは、弟ヤコブの方を愛したのです…。このように、親が子どもたちを公平に扱わないで、ひいきしたり…、逆に、こども同士を比べて、「お前は、あの子に比べて～だ！」というような評価をしたりする時に、子どもは怒りを持つことがあるのではないでしょうか？

③子どものことを、過度に 期待 し過ぎてしまう。

３つ目に、子どものことを過度に期待し過ぎてしまうことも、これまた、子どもを怒らせる原因になったりします。あるいは、また、余りに厳し過ぎるのも問題だろうと思います…。親自身のエゴによって、余りにも高いレベルを決めてしまって…、それを子どもに押し付けたり…、自分が叶えられなかった夢を子どもに押し付けたりしてしまうのです。自分の勝手な理想や、自分自身の勝手な目的を、子どもに対して、無理強いしてしまうのです…。確かに、これも問題ですよね…。

④子どもとの 時間 を取とうとしない。

４つ目に、子どもとの時間を取ろうとしない、ということです。こういうことが続くと、子どもたちは、「自分は親から愛されていない…、必要とされていない…」と感じてしまいます。こういったことは、特に、日本人には多く見られることかも知れません。…と同時に、実は、こういったことは、教会の牧師にも、よく起こりがちなことだろうと思います…。ここ日本だけでなく…、どこの国であっても…、牧師の子どもたちは、このように言うことが多いそうです、「うちのお父さんは、教会のことや教会の人たちのためには、時間を取ってくれるが、僕たちのためには全然時間を取ってくれない…」って…。そうなってしまうと、子どもたちは、自分から親を奪い取ったものを憎むようになっていってしまうのです…。

⑤ 虐待

5番目は、虐待です。これは、必ずしも、肉体的なものだけに限定しません。肉体的であろうと、心理的であろうと、親が圧倒的な力でもって、子どものことを押さえ込もうとすることです…。それ以外でも、親が自分の怒りを子どもにぶつけることや、また、暴力的な行為…、あるいはまた、親の言葉などによっても、子どもに怒りをもたらすことがあります…。子どもの恥（＝間違いや愚かさ、例え、それが罪であっても…）などを人前でさらけ出したり…、人前で恥をかかせたりすることなど…、そういったことも広い意味では虐待に当たりますよね…。

⑥親自身が　自制　できない。

6つ目に、親の行動規範です。親自身が、自制できないのです…。例えば、肝心の親が約束を守らないとか…、親が過ちを犯しても、それを認めようとしない…、謝ろうとしないことなどです…。当然のことですが…、子どもたちは厳しい目でもって、親である私たちのことを見ています…。親自身がしていない…、親自身が実践できていないことなどを…、当然、子どもたちも見習おうとするはずがありません…。

⑦親の行動や判断に、明確な　一貫性　がない。

最後7番目は、親の行動や判断に、明確な一貫性がないことです。親の行動や判断が感情的、気分的であったりすることです。例えば、同じことをして…、ある時はこっぴどく叱ったのに…、別のある時は見過ごしてしまっているということです…。そこに、明確な一貫性があって…、子どもがそういったことを理解していたら…、例え、子どもは自分が叱られても、その責任が自分自身にあることを理解します。しかし、親の感情や気分によって叱られると…、その責任は、自分の罪にあるのではなく、親にあると考えてしまうのです…。

実際、神様は、エデンの園にいたアダムやエバに、『…あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。』（創世記 2:16-17）という明確な規則と、それに背いた時の罰…、つまり、『それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。』（創世記　2:17）という罪の報いを明確に告げてくださいました…。また、神様は、イスラエルの民たちに対しても、十戒などの律法を与えて…、なすべきことやしてはならないことを明確に教え…、それと同時に、与えられるべき罰則についても、予め、明確に教えておいてくださいました。私たちの子育てには、そういったような…、明確な一貫性というものが必要なのです…。

今、挙げたようなこと以外にも、沢山あるでしょうが…、私たちが目標とすべきことは、子どもたちが、親に対して憎しみや激しい怒りを持つことがないようにすることです…。私たち…、クリスチャンの親にとっての目標って…、一体、どのようなものでしょう？…皆さんは、どのような方を目標に据えておられます？⇒それは改めて言うまでもなく…、私たちの“あるじ”であられる神様であり…、イエス様でしょ！だから、私たちは、しっかりとみことばを学び…、みことばを分析し…、みことばを私たちの実生活に…、また、私たちの子育てにも適用していく必要があるのです。実は、それこそが、次のポイントでもあります…。

Ⅱ・　みことば　によって、子どもたちを育てていく！

2番目のポイント…、それは、主のみことばによって、子どもたちを育てていく！ということです…。今日のみことばの後半が、それです。ここには、『かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。』とあります。

●『主の教育と訓戒』とは？

実は、今お読みしました部分に、2つ目の命令があります。それは、簡単に言うと、「育てていきなさい！」ということです。実は、この命令にも先程と同じく、現在命令法が使われていて…、習慣的かつ、継続的に、子どもたちと接し…、必要なものを与えていきなさい、ということが教えられてあります…。

では、ここで言われている、『主の教育と訓戒』とは、どういう意味なのでしょうか？⇒ここで、『教育』と訳されてある言葉（παιδεία）には、「教育、訓練、しつけ、懲らしめ…」という意味があります。また、『訓戒』（νουθεσία）とは、「訓戒、警告、勧告…」という意味です。

みことばが、ここで強調してくれているのは矯正…、つまりは、子どもたちを真っすぐに正してあげるということです…。例えば、あのダビデが、詩篇 51:5 で、『ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。』と嘆いているように…、私たち人間は皆、生まれながらに罪人です。だからこそ、私たちは、常に、罪を矯正して（＝間違いを認めて、誤りを正していく）いくことが必要なのです…。これは、決して、子どもたちだけの話ではありません。例え、大人であろうと…、あるいは、年配になっていようと、それは皆、同じです…。

あのソロモン王が、箴言　22:15　で、このように教えてくれています、『愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る。』って…。また、箴言 13:24 では、『むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。』とあります。また、箴言　29:15　には、こうあります、『むちと叱責とは知恵を与える。わがままにさせた子は、母に恥を見させる。』って…。このように、みことばは、親の厳しい愛によって…、あるいは、親の模範によって、子どもたちを正してやりなさい、と教えるのです。

確かに、聖書のみことばは、このように、ある種の懲らしめを、子どもたちに罰として与えることを教えています…。しかし、私が今、引用した個所を通して、安易に、「あぁ、なるほど…。子どもに鞭を与えれば良いんだ…。子どもが間違ったことをすれば、懲らしめを与えれば良いんだ…。」とは、決して考えないでください！多くの場合で誤解され易いのは、愛のない鞭です…。親が怒りなどの感情で、子どもたちに痛みだけを与えてしまうことです。それは、先程言いましたように、一種の虐待であり…、逆に、子どもたちが憎しみをつのらせてしまう結果に繋がりかねません…。

先程も言いましたように、そこには明確なルールが必要です。また、お互いの信頼関係や納得といったものも絶対に必要です…。そして何より、親が真唯一の神様を信じ、その御方を正しく恐れ、その御方を第一にし…、親自身が神様に従っているという…、子どもへの模範…、証しが絶対に必要なのです…。ですから、そういったこと無しに、子どもたちのことを懲らしめたり、痛みを与えたりしないでください！…もしも、私たちが安易に、そういったことをしてしまうと、子どもたちは、一時的に親たちのことを恐れ、一時的には、親に従っているように見えても、いつか必ず、子どもたちは親たちを憎み、反発してくると思われるからです…。

●クリスチャンの親にとって、最も　重要　なこととは？

皆さん…、こういった教えを見ていきますと、子どもたちを教え導いていく現場は、やはり、家庭であるということに納得していただけます？みことばは、『主の教育と訓戒によって育てなさい…』と教えます。つまりは、私たちに与えられている、「みことばこそが基準」なのです。子どもたちにとって親である私たちが、毎日毎日の生活を通して、信仰を証しし…、子どもたちに真の神様と救いを伝えていくのです！しかし、それは決して、容易なこと…、簡単なことではありません…。

どうぞ、申命記 6:4-9 をご覧ください。ユダヤ人たちの中で「シェマー」と呼ばれている…、とても、重要なみことばです。そこには、このように記されてあります。『4　聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。 5　心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。

6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。 7 これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。 8 これをしるしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。 9 これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。』

イスラエルの民たちは、神様の導きによって、あのエジプトから脱出しました…。しかし、彼らは、自らの過ちと神様への不信仰の故に、その後、40 年間も荒野をさまよいました。その間、神様の預言の通り、ほとんど、すべての世代が代わってしまいました…（民数記 14:29-30）。だから、モーセは、約束の地に入る前、新しい世代の者たちを前にして、先程のメッセージを語ったのです…。「神様を愛し…、みことばを実践していきなさい。それを、子どもたちにも伝えていきなさい！」って…。しかし、イスラエルの民たちは、またもや、過ちを犯してしまいました…。そういったこともあって、親の信仰が2代、3代と続いていかなかったのです。

一体、どうしてなのでしょうか？…聖書を学んでいくと、ある程度の理由が分かってきます。それは、彼らが神様を軽んじ…、神様のみことばをおろそかにしたからです！当時のイスラエルは、自分に与えられた責任の重さを痛感することなく…、しっかりと自分を制することをせず…、神様から与えられた責任を全うしていこうとしなかったからです…。何度も言いますが、子どもたちに信仰を継承していくということは、決して、たやすいことではありません！

最も問題なのは、「子どもたちをただ、教会に連れて来さえすれば良い…」というような安易な考えです。確かに、子どもたちに聖書を教え、教会学校に連れてくることは大事なことです。しかし、だからと言って…、「教会で聖書の話を聞き…、暗唱聖句を覚えさせていれば何とかなる…」と考えて、親である私たちが、積極的に、子育てに関わろうとはせず…、子どもたちに、神様を愛し、みことばを謙虚な態度で実践していこうとするような模範を示さずに、親としての責任を放棄していくなら、間違いなく、そこに神様からの祝福はありません。いや、ガラテヤ6章で教えられているように、神様からの祝福がないばかりか…、自分たちが蒔いてしまった悪い実を、私たち親は刈り取っていかなければならないのです…。

＜励ましの言葉＞

罪に汚されてしまっている私たちは、当然、親としても不完全で…、完璧な子育てなど、できっこありません。でも、だからこそ、天の神様は、私たちに、~~（聖書を示して）~~神のお言葉＆神の知恵である聖書を与えてくださっただけでなく、今、すべてのクリスチャンたちに助け主であられる、聖霊なる神様を与えてくださったのです！今日のメッセージを聞いてくださった皆さんに、神様が期待しておられることは、「よし！私は、みことばを実践していきます！」という決心だけではありません…。

「神様…、私は、神様のみことばを実践したくても、できません。良い親にも、正しい子育てもできません…。だから、どうか、私を変えていってください！私のように、いい加減で…、怠惰な者を、よりキリストに似た者へと変えていってください！こんな私でも、神様のみこころを行なっていけて、神様の栄光を現わせるよう、私を導いてください！どうか、そういったことを私が心の底から願えるようにしてください！」というように祈り…、そのような熱心かつ、謙虚な態度で、心から願うことではないでしょうか？

少し前、私たちが学んだように、私たちが御霊に満たされて生きていくために、何よりもまず必要なことは、①まずは、私たちが救われることでした…。②そして、神様を第一に歩んでいくことです。③また、罪から離れて、自分自身を聖く保っていくことです。④そして、常に、神様やみことばに対して従順でいることです。⑤そうして、すべてのことを神様の栄光のためになしていくことでした…。

どうか、皆さん、御霊に満たされる者であってください！そこにしか、私たちクリスチャンにとっての、安住や祝福はありません…。ダビデは、詩篇 23 篇で、『3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。 4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。…』と歌っています。神様に従い…、神様のみこころに沿って歩んでいくことは、簡単なことではありません…。でも、だからこそ！そういったことで、私たちの信仰が試され…、私たちの信仰がより精練されていくのではないでしょうか…？

どうか、クリスチャンの親として…、また、神様によって救われたクリスチャンとして…、神様の前に正しく歩んでいく者であり続けてください。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。